

# 東京産婦人科医会との 協力による乳房検診

## ■検診を指導した先生

(五十音順)

青木基彰

東京産婦人科医会副会長

青木照明

東京慈恵会医科大学教授

大橋克洋

東京産婦人科医会副会長

落合和彦

東京産婦人科医会副会長

加藤治文

東京医科大学教授

北島政樹

慶應義塾大学医学部教授

木村好秀

東京産婦人科医会学術部長

栗原操寿

慶應義塾大学名誉教授

小林重高

東京産婦人科医会会長

(協力)

慶應義塾大学医学部外科教室

東京医科大学外科第1講座

東京慈恵会医科大学外科講座第2

## ■検診の方法とシステム

東京産婦人科医会との協力による乳房検診は、第1次検診(問診、視診、触診)を東京産婦人科医会(略称:東母)の会員の施設で実施、2次検診が必要とされた人については、東京都予防医学協会内に設けられた「東母乳房2次検診センター(2次検診センター)」で予約制により2次検診(問診、視診、触診、細胞診、マンモグラフィ、超音波断層撮影)を実施する。

2次検診センターの予約は、必ず東母会員の紹介を必要とする。なお、現在の東母会員は1,349人である。

2次検診センターでの検診の結果、精密検査あるいは治療が必要と判定された受診者については、2次検診の所見を記録した書類に依頼状を添えて、3次精密検査医療機関を紹介する。

紹介先の3次精密検査医療機関は、原則として慶應義塾大学医学部外科、東京医科大学外科第1講座および東京慈恵会医科大学外科講座第2としているが、実際には受診者自身の住所の関係もあり、上記医療機関以外の病院で受診されることが多い。

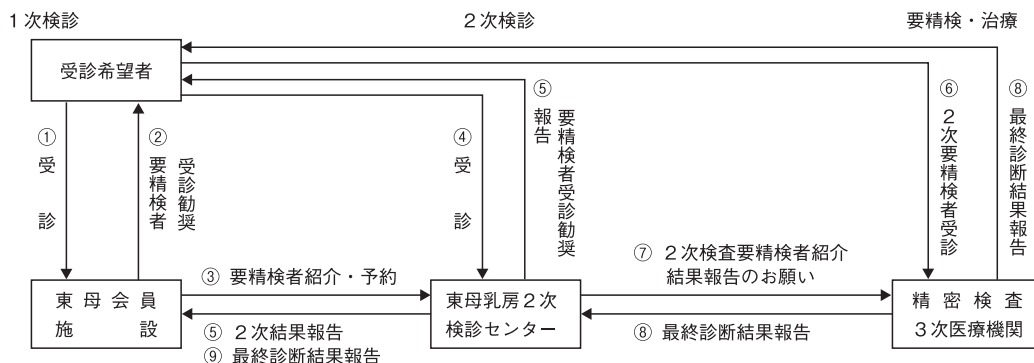
2次検診センターでは、協力医療機関以外の医療機関を受診した人について精密検査や治療内容について報告をしてもらい、データを把握するように努力しているが、受診先の病院も多岐にわたり、すべての病院を把握できず、また、受診先が判明しても十分な回答が得られないことが多いのが実情である。

また、東京都予防医学協会保健会館クリニック外来においても近年、乳がん検診の受診者は増加傾向にあり、ここでの要精検者も2次検診センターを受診している。

2004(平成16)年4月より乳がん検診の指針が改正され、視触診とマンモグラフィの併用検診が推奨されている。このため、東母会員(開業医)での乳房検診受診者の減少が推測される。

検診システムは下図のとおりとなっている。

東母方式乳房検診システム



# 東母乳房検診の実施成績

武智 昭和

東京都予防医学協会検査研究センター

## はじめに

東京産婦人科医会(略称・東母)が、各会員施設で行った乳房検診の2次検診施設として1981(昭和56)年10月に東京・市谷の東京都予防医学協会保健会館クリニックに開設した「東母乳房2次検診センター(以下センター)」は、2003(平成15)年で23年を経過した。センターでは、東母会員の施設で行った乳房検診(問診、視診、触診)で要2次検診とされた受診者を対象に検診を実施し、開設以来の延べ受診者数は10,245人に達した。

## 検診の実施体制と方式

乳房検診は、1次検診を東母会員の施設で行い、2次検診が必要と判定された人が東母会員を通じてセンターを予約し、受診する。センターでは、専門医による視触診、マンモグラフィー、超音波検査の

ほか、必要に応じて針穿刺細胞診(ABC: aspiration biopsy cytology)などの精密検査を行い、さらに精密な検査や治療が必要とされた人には、3次精密検査医療機関(慶應義塾大学医学部外科、東京慈恵会医科大学外科講座第2、東京医科大学外科第1講座)を紹介している。

検診では、1次検診医からの依頼状の内容を確認し、乳腺疾患の背景に関する問診票への記入、マンモグラフィー、超音波断層撮影検査の後、2次検診医の診察が行われる。さらに、必要に応じて、乳房腫瘍に対するABCや乳頭分泌物を材料とした細胞診が行われる。

## 検診成績

### [1] 受診者数

2003年度の受診者数は、表1に示した1,542人が受診、1997年から2001年までの平均年間受診者数の636人に比し、2002年度が1.8倍、2003年度は2.4倍とさらに増加した。

また、2001年度までの初診者における受診動機は定期健診が65%前後であったが、2002年度が78.2%、2003年度は82.7%と増加し、定期健診での受診が定着の方向にあることは早期がんの発見を目的とする意味において望ましい傾向といえる。

表1 受診者数と受診動機

年度	(1981~2003年度)					
	受診者数			受診動機(初診者のみ)		
	初診	要管理	計	定期検診	自覚症状	計
1981~88	3,958	1,594	5,552	520	3,348	3,958
1989~96	3,215	2,390	5,605	1,312	1,903	3,215
1997	350	288	638	236	114	350
1998	349	333	682	225	124	349
1999	281	303	584	185	96	281
2000	291	316	607	187	104	291
2001	301	370	671	197	104	301
2002	662	483	1,145	518	144	662
2003	838	704	1,542	693	145	838
(%)	(54.3)	(45.7)	(100)	(82.7)	(17.3)	(100)
計	10,245	6,781	17,026	4,073	6,172	10,245
%	60.2	39.8	100	39.8	60.2	100

[2] 受診者の年齢構成

受診者の初診時の年齢構成を表2に示した。昨年と同様に40～44歳で受診率が最も高率で19.3%を示し、次いで45～49歳の16.1%、50～54歳の14.6%となる。年代別にみると30歳代が24.9%、40歳代が35.4%、50歳代が22.9%の受診率であり、日本における乳がんによる死亡年齢が最も多いのが50歳代であることを考えれば、40歳代の高受診率は望ましい結果と言える。

[3] 受診者の臨床診断

初診者のみにおける2次検診の臨床診断結果を表3に示した。表に示すごとく、臨床診断においては乳腺症が最も多く、838例中510例(60.9%)で、次いで「乳腺線維腺腫」と「のう胞症」の9.7%で、この傾向はここ数年同様の結果を示している。なお、2次検診に際し、より正確を期すために、生理日前の1週間は避けて受診の申し込みをするように指導している。

表2 受診者の年齢構成

(初診者のみ)		(1981～2003年度)											
年 度	～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70歳～	計
1981～88	65	272	420	658	811	705	543	250	108	71	30	19	3,958
1989～96	39	169	257	463	510	623	529	277	175	100	47	26	3,215
1997	1	6	16	50	59	58	63	46	28	12	8	3	350
1998	3	8	25	57	56	51	75	34	21	10	6	3	349
1999	2	3	19	32	48	55	48	32	23	8	4	7	281
2000	2	6	13	50	55	42	49	37	20	10	6	1	291
2001	1	6	20	47	50	48	55	32	17	15	8	2	301
2002	3	11	29	79	102	113	109	95	65	30	20	6	662
2003	0	13	32	90	119	162	135	122	70	46	30	19	838
(%)	(0.0)	(1.6)	(3.8)	(10.7)	(14.2)	(19.3)	(16.1)	(14.6)	(8.3)	(5.5)	(3.6)	(2.3)	(100)
計	116	494	831	1,526	1,810	1,857	1,606	925	527	302	165	86	10,245
%	1.1	4.8	8.1	14.9	17.7	18.1	15.7	9.0	5.2	3.0	1.6	0.8	100

表3 受診者の臨床診断

(初診者のみ)		(1981～2003年度)										
年 度	診断	乳腺症	乳腺腫瘍	乳腺線維腺腫	乳がんおよび乳がん疑い	のう胞症	乳管拡張症	乳頭部痛	乳頭異常分泌	正常	その他	計
1981～88		1,736	389	489	26	172	52	31	67	435	381	3,958
1989～96		1,424	126	353	170	273	21	1	41	501	305	3,215
1997		182	2	40	15	38	1		2	52	18	350
1998		180		53	13	40	2		1	40	20	349
1999		168	1	41	16	18				16	21	281
2000		181	1	44	18	24				8	15	291
2001		192	1	42	17	13	1		1	11	23	301
2002		424	4	69	26	44	5		3	39	48	662
2003		510	12	81	36	81	2		3	54	59	838
(%)		(60.9)	(1.4)	(9.7)	(4.3)	(9.7)	(0.2)		(0.4)	(6.4)	(7.0)	(100)
計		4,997	536	1,212	517	703	84	32	118	1,156	890	10,245
%		48.8	5.2	11.8	5.0	6.9	0.8	0.3	1.2	11.3	8.7	100

表4 受診者の判定区分

(初診者のみ)		(1981～2003年度)					
年 度	区分	定期検診	要管理	要精密検査	要治療	計	
				良 性	乳がん		
1981～88		2,213	976	454	146	169	3,958
1989～96		1,828	879	286	105	117	3,215
1997		230	100	10	3	7	350
1998		165	163	10	2	9	349
1999		115	147	9	1	9	281
2000		135	134	12	1	9	291
2001		152	125	18	3	3	301
2002		292	338	20	1	11	662
2003		370	416	39	2	11	838
(%)		(44.2)	(49.6)	(4.7)	(0.2)	(1.3)	(100)
計		5,500	3,278	858	264	345	10,245
%		53.7	32.0	8.4	2.6	3.3	100

[4] 受診者(初診者のみ)の判定区分

センター受診者の初診以降の経過を示した区分結果を表4に示す。

2003年度については、「異常なし」、または「軽度の乳腺症」などで次年度以降1次検診医のもとで定期検診を受診するように指示した人が370人(44.2%)、センターでの経過管理を必要とした人が416人(49.6%)、要精密検査が39人(4.7%)、また、治療が必要とされたのは13人(1.5%)であった。

「要治療」の13人のうち良性疾患が2人(0.2%),  
がんと診断されたのは11人(1.3%)であった。

#### [5] 3次精密検査結果

検診の結果, 精密検査あるいは治療が必要とされた場合には, 3次医療機関に紹介している。これらの医療機関から報告された診断結果を表5に示す。

2003年度は74人が3次医療機関に紹介され, 乳がんと診断されたものは30人(40.5%), 「乳腺線維腺腫」9人(12.2%), 「乳腺症」7人(9.5%), 「のう胞症」1人(1.3%)という結果であり, 「無回答」すなわち追跡不可であった症例は10人(13.5%)であった。

#### [6] 乳がん発見率

乳がんと診断された患者数と発見率を年度別に表6に示す。乳がんと診断されたのは, 2003年度は30人(発見率1.9%)であり, ここ数年はほぼ同率の発見率であった。

1981年からの23年間の累計では受診者数17,026人で, 発見された乳がんは571人(3.4%)であった。

#### 施行された手術方式

乳がん患者が受けた手術方式を表7に示す。2003年度は30人が手術を受けた。30人中1人(3.3%)は非定型的根治術を受け, 22人(73.4%)についてはその他の術式が施行されたが, そのうち14人は乳房温存術であった。

本年度までの1次乳房検診の実施については大多

表5 医療機関から報告された診断名(3次精密検査結果)

(1981~2003年度)							
年 度	乳がん	乳腺線維腺腫	乳腺症	のう胞症	その他	無回答	計
1981~88	254	191	133	39	109	183	909
1989~96	182	118	115	12	73	179	679
1997	18	0	2	0	7	2	29
1998	14	6	3	0	4	3	30
1999	14	5	5	1	1	3	29
2000	22	2	2	1	2	4	33
2001	14	5	6	0	3	6	34
2002	23	7	4	0	2	8	44
2003	30	9	7	1	17	10	74
(%)	(40.5)	(12.2)	(9.5)	(1.3)	(23.0)	(13.5)	(100)
計	571	343	277	54	218	398	1,861
%	30.7	18.4	14.9	2.9	11.7	21.4	100

表6 年度別の乳がん患者数と発見率

(1981~2003年度)			
年 度	受診者数	乳がん	発見率
1981~88	5,552	254	3.1
1989~96	5,605	182	3.2
1997	638	18	2.8
1998	682	14	2.1
1999	584	14	2.4
2000	607	22	3.6
2001	671	14	2.1
2002	1,145	23	2.0
2003	1,542	30	1.9
計	17,026	571	3.4

注: 受診者数には, 要管理者を含む。

数が視触診のみで実施されていたが, 2004年度より乳がん検診の指針の改訂に伴って, 視触診とマンモグラフィーの併用検診が実施されることになった。本会では, センターのスタッフ研修や設備の充実などをすすめて, 精度の高い検診の実施を目標としている。

表7 乳がん患者の受けた手術方式

(1981~2003年度)						
年 度	定型的乳がん根治術	拡大乳がん根治術	非定型的乳がん根治術	その他	記載なし	計
1981~88	90	24	62	20	58	254
1989~96	18	3	97	27	37	182
1997	1		11	3	3	18
1998			3	10	1	14
1999			6	5	3	14
2000			13	7	2	22
2001			5	4	5	14
2002			3	12	8	23
2003			1	22	7	30
(%)			(3.3)	(73.4)	(23.3)	(100)
計	109	27	201	110	124	571
%	19.1	4.7	35.2	19.3	21.7	100

注 2003年度「その他」22人のうち14人は乳房温存術。